

兄からのメッセージある女性の手記一

本願寺津村別院（大阪）から出されている月刊誌「御堂さん」の中に、ある女性からの、味わい深い投稿記事が掲載されていました。

それは十四年前のことでした。

投稿者の兄さんというのが、それまでの十年間の闘病生活の後、二十九歳の若さでこの世を去ったのです。

その兄さんが次のような詩を書き残していました。

救われて

むかし叔母に聞かれた
何のために生きているのか
僕は迷わず人々を救うためと答えた
有頂天だね

救われるために生きている
ということを知るまで
十年かかった

この詩を読んだ彼女は次のように思ったそうです。

死を真正面から見続けた十年を送ることで兄は、『救われるために生きている』ことに気付かされていったのです。兄にとって短く辛い人生ではあったけれど、阿弥陀さまに出遭えた尊い、有り難い人生だったと思います。私はこう思うことで、兄の死を受け入れていきました

ところが、そう思っていた矢先、兄の遺品の中からビデオレターが見つかったのです。そのビデオというのは、病床にあった兄が、死を目前にして、自分のメッセージを収録していたものでした。

ビデオには、両親や友人に向けて感謝の言葉が語られていたのですが、彼女へのメッセージだけは違っていたのです。

そこに吹き込まれていたものは

〇〇子、阿弥陀さまって本当にいてはるの？
お浄土って本当にあるの？本当に僕を救ってくれるの？

というメッセージでした。

このビデオを見た彼女は愕然としました。

それは、死を前にした者の、抑えきれない心の叫びのように思えたのです。

「救われるために生きていることが分かった」と詩に書いていたはずの兄が、なぜ、最期の最期にこのようなことを私に語ったのか？

その時、彼女は「兄のこの遺言を、何としてでも確かめたい」と、心に固く誓ったそうです。それからの彼女は、お念仏のみ教えを聞く聞法の日暮らしが始まりました。そうして、いつしか十四年の歳月が流れ、現在の心境を彼女は語ります。

「今、兄が同じ問いを私に投げかけたなら、私は、『お浄土は本当にあるよ。というより、本当にあるといえるのはお浄土だけだと聞かせて頂いているよ』と答えることが出来ます。それが兄への慰めなのか、私自身がそう頂いているのか、それは分かりません。ただ私に出来ることは、聞法へと導いてくれた兄を還相の菩薩であったと仰ぎつつ、これからも聞法を続けてゆくことだけだと思っております」

こうして語る彼女の言葉には、お念仏のみ教えへに対する深い理解がうかがえます。ここで言う「還相の菩薩」とは、「お念仏のみ教えに導いて下さる仏さま」ということです。

彼女は、み教えを聞かせて頂くうちに、兄の最期は、決して迷える者の悲痛な叫びではなく、迷えるこの私に目覚めを促す仏さまの善巧方便（巧みな手立て）であったのだと、受け止めていかれたのです。

彼女の兄の最期の言葉は、死への恐怖心から出たものかもしれませんが、ここで気をつけて頂きたいのは、お念仏を喜ぶ身になっても、死への恐怖心は私たちから消えることはないということです。

この身のある限り、やはり死は怖いし、死にたくないのが私たちの偽らざる心です。

そのことについて、親鸞聖人は次のように仰っています。（『歎異抄第九条』）

お念仏を申す身にさせて頂きながら、浄土に早く往生したいという心も起こらず、ちょっとした病気でもすると、もしや死ぬのではないかと心細く思うのは煩惱の仕業です。そうした私であることを阿弥陀さまはとっくにお見通しの上で、煩惱具足の凡夫を救おうと仰せられていることですから、阿弥陀さまの本願はこのような浅ましい私のためであったのだなと気付かされ、ますますたのもしく思われるのです。

この娑婆世界に、いくら未練があっても、この世の縁が尽きた時には、かの浄土に参ればいいのです。

早く浄土に往生したいという心の起こらない私のような者を阿弥陀さまはことのほか不憫に思われているのですから、私どもの往生は間違いありません。

このお言葉が示すように、お念仏を申す身になった者は、死の恐怖があろうがなかろうが、うろたえようがどうしようが、そんなことは、阿弥陀さまのお救いには、全く関係のないことが分かるのです。

それが「無条件で救う」と仰せられた阿弥陀さまの大悲のお心なのです。
ですから、私の唯一出来ることは、この阿弥陀さまに「おまかせする」ということしかないのです。

生きることも死ぬことも、私の人生すべてを、阿弥陀さまにおまかせするのです。

そうすることによって、我が人生に起きる、ありとあらゆることが、お念仏のみ教えに導いて下さる阿弥陀さまの善巧方便なのだと思え止めていくことが出来るのです。

まさに「何がきてもかまいません。ようこそ、ようこそ南無阿弥陀仏・・・」です。
その時、私たちは本当の意味で救われたといえるのです。

—参考までに—

*「還相（げんそう）」について

念仏（南無阿弥陀仏）には「往相のはたらき」と「還相のはたらき」があります。

往相とは私の人生が浄土に向かって歩いていくということです。

還相とは浄土に往生した者が、仏、菩薩となってこの世界に還り来て、迷える人々を救済するということです。どちらも阿弥陀さまから与えられるものです。

*「善巧方便（ぜんぎょうほうべん）」について

善巧方便とは、仏、菩薩が巧みな方法を用いて、衆生を悟りに導くことを言います。

「弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を現じたまふなり」と親鸞聖人が仰っているように、阿弥陀さまは迷える私たちを救うために、千変万化しながら、ありとあらゆる姿をとって下さるのです。

また、いかなる人も、阿弥陀さまと同じようなはたらきをする仏さまにして下さるのです。

平成17年4月 「光明寺だより39号」より